ALWAYS BE...

<いつも心がけましょう>

アン・アンダーソン

1950年代に私が生まれ育った家の向かいには12面のテニスコートがありました。私は母におねだりして、当時は木製だったラケットを短く切ってもらって、グリップテープの代わりにダクトテープを巻いてもらいました。私は毎朝ワクワクしながらテニスコートに出掛けて、新しい友達を作ったり、一人壁打ちをしてきたものです。

それから55年の歳月が過ぎた今でも、テニスをしています。2008年には、クラブのテニスディレクターのダリル・グリーンストリート氏の勧めを受けて、PTRの認定試験を受け、それ以降、10歳以下の子供たちや、大人の初心者の方々や年配の皆さんのテニスのお手伝いをする仕事に入り込みました。（仕事と言うにはおこがましいですが・・・）

そしてわかったことは、これらの3つの世代に共通して言える上達の秘訣は「成功体験」を得るということです。そうさせるために「10歳以下の指導で心がける事柄」を整理しました。これらにちょっと捻りを加えれば、大人の指導にも当てはめることができます。

【いつも丁寧に】

6歳以下の子供たちには「マナー」という言葉を教えています。それよりも大きな子供たちには「エチケット」という表現を使います。子供たちに分かちあったり、支えあったりという「チームワーク」を指導する機会は沢山あります。また、親たちとも子供たちの状況について、直接話したり、メールを送ったり、電話で話したりといったコンスタントなコミュニケーションが必要です。そして、子供たちにも親にも「ありがとう！」を忘れずに。

【いつも親切に】

困っている子供がいたら、すぐに易しい方法を教えてあげましょう。また、易しすぎると思ったら、ちょっと難しくすることも必要です。

【いつも意思の疎通を】

レッスン中に子供たちの名前を使って呼びかけることは、子供たちにとってはもちろん、親も自分の子供の名前が呼ばれているのを知ることは嬉しいことです。レッスン中でも、親と10秒間でいいから、それぞれの子供が今取り組んでいる技術についての進捗状況を話ししましょう。そうすることで、親の関心も高まり、レッスンが終わってからの子どもとのコミュニケーションの助けになると思います。

【いつも指導を】

PTRの講習会を受けたことで、私にはどんな生徒にも指導できる基盤を与えてもらいました。子供には、グリップを教えたり、ラケットの安全な扱いを教えたり、競技者としての正體の使い方を教えるなど、適切な補助を継続することが大切です。

【いつもエネルギッシュに】

それぞれのセッション中に一日は「BFFの日」を設けて、レッスンを受けている子供の友達に無料でレッスンをするようにしています。そうすることで、特別に宣伝費用をかけなくてもプログラムへの参加が増やせますし、子供たちも友達と一緒にテニスができることを喜びます。そういった日には、テニスボールの代わりに風船を使って、初めてでも上手く打ち合える体験をさせるようにしています。子供たちは皆とても喜びます。

【いつも安全に】

PTRの講習会では、コート上はいつも安全な場所にしておくことも学びました。このことは、特に小さな子供たちを相手にする時には大切なことです。転がっているボールを片付け、圃場教材や道具などはきちんと整頓しておき、水分補給への配慮をすることなどです。子供たちの安全には責任があります。[編集者付記： 指導者には賠償責任保険への加入を勧めます]

【いつも熱意を持って】

クラブの玄関を入った途端に「仕事モード」に切り替え、私が59年間親しんできたスポーツの喜びを共有することに努めます。他の色々なスポーツなどとの生徒の獲得競争に勝つためには、指導者が「素晴らしいテニスの体験」をさせることができるかどうかが鍵となります。子供も親も、いつもポジティブで楽しくやりがいを感じていれば、もっともっとテニスをやりたいと思うようになりますし、大人になっても続けてもらえるようになります。

【いつも学ぶ姿勢を】

プロとしては、学ぶ姿勢を持ち続けることが肝要だと信じています。私は、他のクラブの様子を見学したり、オンラインで新しいドリルを探したり、テニスプロの記事を読んだり、時間が合えばPTRの講習会を受けるようにしています。生涯学習は喜びであり、そこから得られる新鮮さを生徒に伝えることが喜びです。

【いつも楽しく】

素晴らしい指導も、楽しくなければ伝わりません。子供にバランスについて教えるのに、ただ「片足で立って。」というよりは「大きなフラミンゴになったつもりで立ってごらん。」と言ったほうが遥かに楽しいですよね。また、いろいろなステッカーや、ちょっとした小物を箱に入れておいて、毎日のレッスンが終わった時にご褒美に使うようにしています。そして期の最後にはMVPのような大きな賞を出すようにもしています。最近では、大会で余ったトロフィーを使ったことがあり、多くの子どもたちは「生まれて初めてトロフィーをもらった！」と大喜びでした。工夫次第で、子供たちにインパクトを与えるのに余分な出費をする必要はありません。

最近のレッドボールのクラスの最後に、6才のモリーがお母さんと私にこう話してくれました。「私、結婚してからもテニスを続けるんだ！」と。彼女はテニスの楽しさを既に感じ始めていて、次のコースを楽しみにしていたのです。「やった！」という気分ですね。

私はPTRの一員となったことで、テニスの素晴らしさを共有する術を学びました。私は子供の「やったー！」という言葉が聞けると、とても報われた気持ちになります。

【筆者略歴】カンサス大学出身で、同州トピカの、ウッドバレー・ジェネシス・ヘルスクラブのティーチングプロ。
【翻訳・監修】鈴木眞一